

知的障がい者、長編ミュージカルに挑む劇団 H A S C A P の足跡

金田一仁志（舞台芸術研究グループ研究員）

「Hーハンディキャップを持つ、Aーアーティストが、Sー札幌で、Cーチャレンジする、Aーアー

トな、Pープロジェクト。全部つなげて劇団名はH A S C A P（ハスカップ）でどうでしょう？」……そう、いつもの思いつき、ゴロあわせからのスタートだった。それがまさか、こんな大きな取り組みになるなんて……

三年前僕はこのP R O B Eに「知的障がい者に芝居が出来るか？」と書いた。障がいを持つ皆さんと演劇をつくることになったからだ。キッカケはワークショップ受講生の「金田一先生の授業って、障がい者教育にびつたりだと思ふ。友達が学校をつくったので、よかったら紹介しますよ」の一言だった。週に一度、日中の一時間半をボランティアで、とくれば、演劇を知る人なら「ちよつと待て」となるだろう。演劇教育では脚本の執筆、生徒の個性に合った配役、生徒を取りまく人々とのコミュニケーション等、「日中一時間半」以上の時間がどうしても必要となる。そんなめんどろな仕事をまさかボランティアで、とお思いの方もおられよう。だが僕に

はこの仕事と出逢う予感があったのだ。すこし長くなるが、ここに記す。

もう四〇年以上も前、オホーツクの片田舎の高校生だった僕が欠かさず観ていたテレビ番組、それは地元S T V（札幌テレビ放送）制作の「サンデー九」（毎週日曜朝九時）だった。

メインパーソナリティは「上を向いて歩こう」の、あの坂本九さんである。その頃、僕の住む田舎の町には障がいを持った人々があたりまえに暮らしていた。小学生のY君は障がい者学級（当時は特殊学級と呼んでいた）に通っていたし、足の悪いS君は（松葉杖なのに自転車に乗ることが得意で、しよつちゆう行方不明となり）まわりを騒がす人気者



サンデー九（写真提供：札幌テレビ放送）

だった。トタン屋のE社長は耳が不自由で（工業高校生だった僕は屋根ふきのアルバイトでたいへんお世話になった）、その社員の多くも障がいを持つ人々だったし、僕の母親も片耳が聴こえない。だから町内における障がいの割合は、かなり高かったろうと思う。

そんな中で、僕は育った。だからテレビ番組「サンデー九」にはおどろいた。

だって「今、行政は町の中心から障がい者をしめ出している」というのだ。田舎ではあまり感じたことはなかったが、時代は確実に障がい者を郊外の施設へと追いやっていた。

そこに切りこんで行ったのがSTVだったのだ。九さんは地域の障がい者をたずね、インタビュを重ねていった。四〇年たつても忘れられない九さんの言葉がある。それは「なぜ人は、障がい者を都心から排除するのか？人は皆、歳をとれば障がいを持つのに」である。これは、当時の高校生を心をゆさぶるに十分な力があつた。「ああ、この人のようにになりたい！」僕は心からそう願ったが、叶はずもない。田舎の一高校生の只の「たわごと」だ。赤面症を直すために演劇部に入った一六歳が、テレビに出るなんて・・・（今回はその後のエピソード――放送局にチケットを売りに行った僕がなぜテレビリポーターになったのか、番組終了後なぜパートの専属キヤスターに、そしてどうして「サンデー九」のSTVスタッ

フたちと出逢うことになったのか――を大中に割愛する。「出会いには偶然ではない」以外説明がつかないからだ。

さて、高校時代にお世話になったM先生のご紹介で専門劇団に就職するも、文芸演出で食っていくという夢はすぐに破れ（ドサ巡りの劇団は何でもやらなければならぬ）一番苦手だった演技（俳優）部に配属。しかしそこで、現場でしか味わうことの出来ない貴重な体験をすることとなる。

ドサ巡り（正式には地方巡演劇団といって、東北以北の小・中・高校の体育館等で公演活動が続けていた）だから、養護学校での公演も多かった。札幌市内の白樺養護、星置、そして当時巨人軍の王選手が来道のたびに通っていた西区の山の手養護は常連。その山の手養護学校での出来事だ。

公演を終えバラシ（道具の撤収）を行っていると、子どもたちが遠くからこちらの様子をうかがっている。芝居が終わったあとの片づけには誰だって興味が湧く。場劇だった空間があつという間にもとの体育館に戻る。そして作業しているオジサン、オバサンは、さつきまで舞台で歌い、踊っていたあこがれの（？）役者さんなのだから。

搬出口へと台車で小道具を運んでいた僕のそばに、松葉杖の男の子がひとり、かけ寄ってきた。「それどうするの？捨てるの？」。子どもからすれば使い終わった小

道具だ、捨てる物なら、もしかしてもらえぬかも知れない。だから僕は台車を押しながらこう答えた。

次の会場で、このお芝居を待っている人たちがいるのだ、と。その時、段差につまずいたのか、その子が廊下にバタリと倒れた。当然僕は台車を止め「大丈夫？」と手を差し伸べる。その瞬間！「手を貸さないで！この子は自分で立てます！」という声が、バラシの騒がしい空間を切りさく一本の矢のように飛んできて僕に突きささった。たぶん物かげからその子を見守っていた支援員が発したものだろう。その子はまるで夢から覚めたようにその場に立ち上がり、去っていった。「手を貸さないで！・・・この言葉は僕の心に、一本のとげとなつていつまでも残った。困った人がいたら手を貸すという行動をあたりまえとして僕は育ったのだ。障がいを持つ人たちと、どう関わっていくのが正解なんだろう・・・。だから受講生に「金田一先生の授業って障がい者教育にびつたりだと思う」と言われた時、ああ、時が巡ってきたな、と、そう思ったのだ。

知的障がい者が芝居ができるか？そんなことはわからない。でも「表現したい」という思いはみんな同じではないだろうか？よし、わからないんだから、やってみよう。こうして僕のチャレンジは始まった。——ここまですべての PROBE の骨子であったと思う。

さつそく白石区にある自立訓練（生活訓練）事務所、

チャレンジキャンパスさつぽろへと向かった。おどろいたのは（三階建て一棟借りだけでなく）その立地条件だ。町はずれではない、地下鉄東札幌駅徒歩五分の、町の中である。施設、いや「学校」のまわりの商店街の皆さんの協力体制もすごい。障がいを持った生徒たちは昼、隣の総菜屋さん、ななめむかしのコンビニやパン屋さんへとそれぞれ買い物に行く。買いきり足りなくなったり、困った行動があったりした場合、キチンと学校に連絡が入る。それは苦情ではなく、一緒に子どもたちを育てる、地域の目であった。僕は不登校の中・高校

演劇や研究通じ 自立育む

知的障害者作業所が発表会



知的障害のある生徒らが、後、自立に向けた授業など
高等支援学校を卒業した
を学ぶ作業所「チャレンジ

熱のこもった演技を披露した、チャレンジ
キャンパスさつぽろの研究発表会

キャンパスさつぽろの研究発表会が11日、札幌市白石区の札幌コンベンションセンターで開かれた。市民ら約150人を前に、通所者16人が演劇などを披露した。

この作業所は2011年に開設。通所者が年間か

生を集めてフリースクールをやっており、引越しの時にはひどく辛い目に遭っている。わかりやすく言えば不登校の生徒は「気持ちが悪い」「町のランクが下がる」等の中からさまざまな誹謗だ。心がやさしいから不登校になるのだ。金(茶) 髪やピアスは、彼らの鎧なのだと言っても、思いは伝わらなかつた。

だからきつとこの場所に障がい者の学校を作るときも、かなり反対があつたにちがいないと思ひ施設長の小沢さんに聞いたのだ。「いやここは最初から優しく迎えてくれたんですよ。地域的に田舎だからかな?」と言つていたが、東札幌は十分に都会だ。まことにラッキーな、希有な例と言うほかはない。

特筆すべきは隣のお総菜屋さんだ。若いスタッフがい物に行くとき「あんたはまだ結婚前だから栄養をつけて」と一品多く渡される。「講師のお弁当だ」と言うときだまつてカボチャの煮つけのサービスだ。そう、施設のまわりの商店街が応援団なのだ。ボランティアで呼ばれた僕は、しっかりとこの満腹のお弁当に胃袋をつかまれている。

さて、演劇の取り組みに話を戻そう。第一回の公演作品に選んだのは小学校の教科書にも載っている「三年とうげ」だ。群読の形式をとり、上演時間も十分ほどなので、初めてチャレンジする作品としてはもってこいだと思つた。

ただどんなに短くても演劇であるからにはセリフをおぼえるだけではなく、相手に、客席に届けなければならぬ。相手役との台詞のやりとりを行わなければならぬ。……のだが、正直、ここが最初の難関だった。苦手のなのだ。人と会話する「間合い」と「距離感を保つ」、「リアクションを表に出す」ということが!

ここからスタートだった。目と目が合つたら挨拶をする。挨拶から会話をつくる。相手に思ひを、声を届ける。いつのまにか僕の口調は、高校時代、赤面症を直すために一生懸命になつてくれた先輩のそれと同じになつていった。

熱心な支援員の皆さんの協力もあり、第一回の公演は無事に終わった。気を良くしたスタッフは、次はもっと長い作品を、という思ひを伝えてきた。そこで、第二回は僕の脚本・演出の「野良犬たちのブルース」に決定したのだが、上演時間は一気に四五分だ。歌も、ついでに舞台装置も作らなければならない。出来るのか? 健常者が一〇分で覚えられる台詞に二日もかかる生徒たちにはたして……

今までになくきびしい稽古が始まった。「台詞は明確でなくてはならない、演技は的確でなければならない」東京の劇団、民藝の教えて育つた僕は少しでも理想に近づけようと腐心した。僕が「どうせ障がい者に出来るのはこの程度」とあきらめてしまつたら、彼らの伸びしろ



俳優の金田（仁志さん）左の指導で練習中。助む劇団のメンバー

札幌の劇団HASCAP

知的障害者 長編に挑む

札幌の知的障害者をつくる劇団「HASCAP」（ハスカップ）が24日、札幌市白旗の札幌シンパシオンセンター（東札幌6の1）で、1時間を超える長編ミュージカル「おーい」とをたて、上演する。劇団設立が約4年目、せりふや演技の多い長編に初めて挑戦。知的障害者だけで長編を演じるのは国内で珍しく、演出・脚本を手掛ける札幌の俳優金田（仁志さん）69は「知的障害者の『表現したい』の思いを見てほしい」と話している。（荒谷健一郎）

14日に白旗で行われた通し稽古で、金田さんの演技の直には細かく言われた。「一生懸命な時間があった」と、おーい（白旗）は、生活訓練の1環で設立された。テレビなどで活躍する金田（仁志さん）は、練習に取り組んだ。ボランテアで引き受けた金田（仁志さん）は、劇団名を「HASCAP」の「H」は「英語のせりふ」を「A」は「アクセシブル（障害者にとって使いやすい）」、「S」は「サポート（支援）」、「C」は「コミュニケーション（コミュニケーション）」、「P」は「パフォーマンス（パフォーマンス）」と語っている。

ミュージカル

北海道新聞（夕刊）2018年12月20日

はそこで絶たれてしまう。しかし「もっと大きな声で！」とやってみせると、僕の声の大きさにおどろいて教室を飛び出していく生徒がいた。日常じゃこんな大声、出さない（聞かない）もんなあ……。

それでも続けなければならぬ。「演劇は長距離マラソンのようなもの。やる、と言ったからには途中でへこたれず、ゴールまで走りつづけなくてはならない」という事実を、今こそ僕は態度、行動で示さなければ。そう

思った。

しかし使命感だけの演劇づくりはうまく運ばず、僕はガツクリと肩を落とした。そんな時、生徒の保護者からの声が届く。「今まで身内にしか聞きとれなかった子どもの言葉が、まわりの人々にも理解されるようになった」という。滑舌がよくなった。生徒たちは僕の気づかぬところで一生懸命に台詞の練習をやっていたのだ！一本の作品に思いのたけを詰めこむには無理があった。でも少しづつなら……

このことは大きな学びとなった。そして昨年三月、「野良犬たちのブルース」は上演された。報道写真からも、それぞれが他者との（苦手だった）コミュニケーションを、リアクションをとっているのが、その目線、表情で伝わると思う。そしてついに僕は、今回の取り組み

みにふれなければならぬ。昨年一二月に上演した、なんと一時間超の（歌あり踊りありの！）ミュージカル、「おーい！ともだち！」である。松野正子さん作の絵本「こぎつねコンとこだぬきポン」をもとに、人はなぜ争うのか、健康、障がい者をなぜ分けるのか、という思いを「最初はひとつの大陸だった」という歌にのせてつづった長編である。

もとより劇団四季のような作品づくりはめざしていない（しかし四季には出来ない作品を作ってやろうと思っただ）。ただ、前回の公演から賞味九ヶ月を切った中で、歌、台詞、踊りありの新作が出来るのか？作品づくりをあせって、うまく行かなかった前回の轍を踏んではならない。

週一回、一時間半の僕の時間だけではどうやっても足りない。他の授業時間もフルに利用しての「演劇漬け」の毎日が始まった。僕は芝居の段取りをつけた後、稽古の多くを毎日一緒に居る支援員に委ねる作戦に出た。僕が出しゃばりすぎると生徒たちが委縮するのがわかったからだ。すこし距離をおいて、僕の時間を「笑いのあるレッスン時間」に変えた。

この頃の稽古の模様を、稽古場に足しげく通って取材して下さった方がいる。北海道新聞のA記者だ。紙面の都合上、すべてを載せることは出来ないが、八段ぶち抜きのたいへん大きな記事で、どこに行っても「見たよ」

と言われ、記事を読んで会場に来てくれた仲間もずいぶんいた。感謝している。会場は満席で、立ち見の出る盛況であったことをここに記す。

この記事の中で小沢施設長は「練習で吃音（きつおん）が減った利用者（生徒）もいる。障がい者の可能性は無限大」、札幌協働福祉会の池田総合施設長は「知的障がい者だけの長編の演劇は道内では聞いたことがない」と語っている。

さて、一〇分から始まり、四五分、一時間となった演劇公演の今後は？実は今回の作品「おーい！ともだち！」を続投しようと考えている。学校（チャレンジキャンパスさつぽろ）には卒業・入学があるから、メンバーは年々変わる。その時々メンバーと一緒に、演劇づくりを楽しもう。

役者は暗記した台詞を音声化する機械ではない。感情はどこで、いつ生まれたのか。その思いはコトバとなつて、誰のもとへ届けられるのか。きびしい練習の中で「他者とコミュニケーションする」楽しさが伝われば。そして演劇づくりの経験が、荒波の社会へと旅立っていく彼ら彼女らの、何らかの栄養となれば——そう思っている。